世田谷村日記

石山修武

十二月一日

九時過、小田急千歳船橋駅のプラットホーム待合室。小さなガラスの箱の中に、人間が木枯らしを避け少しばかりの暖をとるために、しばし閉じ込もっている。向かい側のホームにも同じような箱があり、同じように人間が入っている。標本箱みたいだ。電車も中に入ってみるとこれも動く標本箱である。ガラス窓を介して外を視るという事は、同時に視られているという事でもある。誰に視られているのか。不特定多数の無数の眼に視られている。ひそやかな相互監視ととるか、情報の公開的空間ととるか。電車の中はケイタイと小型コンピューターに没頭する人が多い。彼等はここに居て、同時にここに居ない。距離によって生まれる古典的パースペクティブの外に居る。こうして風景、空間は情報という無数の記号や言葉によって侵蝕されてゆく。無数の記号は空間浮遊し、散在するのではない。それは空間をむしばんでいる。むしばまれた空間を我々はそれでも生きてゆかねばならない。

そんな中で、野本君は私の研究室では貴重な人材である。私のバウハウスとのワークショップからの成果の人材が、かくの如き人間であるのなら、私はそれを素材に、各論としての教育を出発させた方が良かろうと考える。俗世間で言うところの優秀な要領の良い人間ではなく、ゆっくりと耐えて、あきらめない人間とでも言うか。

野本君の父親は福岡で設計事務所を経営している。父親の野本君に対する期待は大きいものがあるだろう。それが色んな事情の困難に会うことになった。野本君も人生で初めて本格的な難問に対面する事になっている。これで大人にならなければ、もう二度と抜け出るチャンスは無いだろう。

来年の春迄、野本君は研究室にあずかる事にした。「ひろしまハウス」と福岡の住宅への、広島の木本一之君の参加へのコーディネート、利根町プロジェクトへの参加を十二月の彼の仕事にする。

十三時過森の学校の打合わせを教え、再び小田急線車中。先程森の学校の敷地を通り過ぎた。十七時過、ガウディのＮＹホテル案（高さ三百三十メーター）を、お台場に建てたいという人物来室。十九時前まで話しを聞く。又、もう少しプランが煮つまったらお目にかかりましょう、と言う事になった。どうせ、やるなら丹下さんのフジＴＶ前の土地にしてくれと申し上げた。十九時研究室研修生の野本君の父君来室。野本君の将来計画について相談。野本君は早稲田・バウハウス・ワークショップの一期から学生で、向学心は強いのだが、マア謂はゆる試験みたいなモノに弱い人で、色々とうまくゆかない事もあった。しかし、早稲田の大学院生レベルはアメリカの一流大学の院生の努力のエネルギーと比較すればその勉強のレベルは低いのは歴然としているし、体力、気力も弱い。日本の大学生、院生のすべからく、それは言える。一人一人の人材はそれぞれに大事にしなくてはいけないという当り前の事を野本親子から教えられもした。

帰宅すると、故佐藤健の息子、論から手紙が着いていた。周囲は皆、二代目の時代に移行している。